

「中大規模木造建築物の耐久性向上のための設計・施工マニュアル」説明会のQ & A

令和3年3月24日

令和3年2月15日に開催いたしました標記説明会につきまして、多くの皆様のご参加を賜り、誠にありがとうございました。

いただいたご質問と、ご質問への回答を次のとおり公開いたします。

質問と回答

ページ	質問	回答
第3章	耐久性を確保するための設計手法	
3-14	「加圧式保存処理は～中略～大断面部材等への対応は難しい場合が多く」とありますが、なぜ大断面对応が難しい場合が多いのでしょうか。	JAS、AQでは大断面集成材についての基準が整備されていないので、対応が難しいという記述としています。
	大断面とは具体的にどの程度の大きさを念頭にされているのでしょうか。	大断面は概ね集成材の JAS に規定されている「大断面集成材」の断面寸法を想定しています。
3-15	「加圧注入の薬剤は金属成分を含有している」とありますが、金属を含むものと含まないものがあるのではないのでしょうか。	貴見のとおりです。 該当箇所では、金属成分を含有した薬剤を使用した場合について言及しています。
3-18	防腐・防蟻処理について「CLT は表面処理が基本となる」旨の記載がありますが、基本とは何に基づく判断でしょうか。	AQに「防腐・防蟻処理直交集成板」がありますが、現時点では認証を取得している製品はないので、表面処理が基本という記述としています。
3-18	保存処理集成材には、加圧注入処理した集成材のひき板（ラミナ）を積層接着する製造方法と、積層接着された集成材に加圧注入処理する製造方法があり、「防腐・防蟻処理効果の観点から見ると前者の方が望ましい5」とありますが、なぜ前者の方が望ましいのでしょうか。注入してすぐに使用できる後者の方が良いのではないのでしょうか。	ラミナ1枚1枚に薬剤処理を施すことで、材断面の中央部まで薬剤が浸透することから望ましいという記述としています。
3-18	「接着剤混入～中略～防腐・防蟻処理合板がAQ認証されています」とありますが、加圧注入合板もあるのではないのでしょうか。	貴見のとおり AQ には加圧注入合板があります。
3-22	1行目：銅を含まない防腐・防蟻剤を使用又はヒノキやヒバなどの防腐・防蟻処理が不要な樹種を使う方法があります。とありますが、ヒノキやヒバなどのD1樹種であれば辺材を含むものにおいても、防腐・防蟻処理は必要ないという誤認識を招きませんかでしょうか。 ・ヒノキやヒバでも辺材は他樹種とほとんど変わらない性能であり、JASにおけるD1樹種は心材の耐久性区分で分けられており、4-36(2)などの様に、心材の耐久性区分D1のうち特定の樹種の心材のみを使う場合などの表記にすべきではないのでしょうか。	貴見のとおり誤解を招く可能性があるため、適切な表現に改めます。
第4章	耐久性を確保するための各部の設計・施工のポイント	
4-18	中大規模木造建築物における検討のポイントとして「大断面部材等は加圧式保存処理が出来ない」とありますが、なぜ大断面部材等は加圧式保存処理が出来ないのでしょうか。大断面とは具体的にどの程度の大きさを念頭にされているのでしょうか。	No.1と同様に「加圧注入による薬剤処理が難しい」という旨に改めます。

上記質問のほかにもご意見をいただきありがとうございました。いただいたご意見に関しましては回答の掲載を控えさせていただきます。